

江戸時代でも、幕末になって幕府の力が地に落ちた時に初めて「列公（大名）会議を開いて合議で国家の方針を決めよう」などと言い出したが、それまで幕府は日本の国政に外様大名を参加させようとは一切しなかった。国政の運営をする老中は、大名は大名でもすべて譜代大名、つまり徳川家の家臣だった大名からしか選ばれないようにしていた。つまり「野党」はないのである。

ここところが現代の日本人には一番わかりにくいところかもしれないが、こうした「旧式」の権力にとっては、それ以外の者が批判することはすべて罪なのである。批判の内容が正しかろうと、誤りであろうと、そんなことは問題ではない。批判すること自体が罪になるのだ。

直訴じきそという言葉を御存じだろう。たとえば農民が自国の大名の不正を老中や将軍に直接訴えたら、吉宗以外の時代ではどういうことになったか？

死刑である。この場合、訴状の内容が正しければ大名の方も罰せられる。しかし、仮に大名の悪業が訴状通りだったとしても、直訴した側の罪も消えない。なぜなら「身分」もわきまえずに「批判」したこと自体が罪になるからなのだ。

その奥には「お上は絶対に誤りを犯さない」という考え方がある。もちろん、そんなことは絶対には有り得ない話なのだが、もう一度この二十一世紀の地球にも、そんなバカなことを信じている政府があることを思い出して頂きたい。

②

さて、それだけの、いわば民主主義社会と独裁主義社会の基本的な常識を頭に入れた上で、もう一度「目安箱」を考えて頂きたい。

まず、これを設置するには大前提があるということだ。それは「お上といえども誤りを犯すことがあられるかもしれない」という発想である。無謬性の否定といってもいい。

これがどれくらい画期的なことかもうおわかりだろう。由井正雪の乱の頃には全くなかった発想だ（第12巻『近世曙光編』参照）。

吉宗は「徳川將軍家といえども誤りは犯すことは有る」と他ならぬ目安箱の設置によって宣言したのである。二十一世紀における中国が未だに出来ないことを、十八世紀の吉宗は既にやっていたのである。

一部の家臣は激しく反対したという。これも現代の日本人から見れば愚かな保守主義としか見えないかもしれないが、彼等の反対にも一理ある。それは「將軍家の権威を傷付けることにならぬ」というものだ。確かにそれは正しい。徳川家が日本を治める論理、それは初代將軍家康の論理といってもいいものだが、「徳川家は絶対に正しく誤りのない家」であるから徳川が天下を治め、外様大名は国政に参加させない、というものだ。それだけ権威があるということでもある。逆に言えば、権威を傷付けるようなことは一切してはならないということ、それが反対する側の論理なのである。

③

しかし、吉宗は反対を押し切って目安箱を設置した。そして、様々な投書が来た。その中には、並の君主なら投書者を死刑にするような手厳しい批判の投書もあった。

■目安箱に投書された浪人から將軍への「諫言」

目安箱は江戸城の役所部分の玄関ともいべき評定所前に置かれた。

大きさは七十五センチ立方ほどの木箱で上に銅板が貼られ約六センチ四方の穴が開けられていたという。

毎日置かれたのではなく、評定所の式日である毎月二日、十一日、二十一日の三日間だけ、昼九ツ（この）（正午）までで、百姓・町人は誰でも投書することができた。

後には京と大坂の奉行所役宅前、そして同じく幕府直轄地である駿府や甲府の目付小屋前にも設けられた。昔は交通が不便だったから、江戸までわざわざ出て来なくていいようにしたのだ。

前節で述べたように、この目安箱の設置までは、いくら正しいことでも庶民は訴えること自体が罪になった。「お上の御政道に口を出す」ことそのものが罪だからだ。

將軍（あるいは老中）への直訴は死刑であった。それが、訴えること自体は罪に問われなくなったのだから、まさに画期的改革といえる。

もっとも厳しい条件もあった。

第一に、投書者は必ず住所氏名を記さなければいけなかったことだ。無記名の投書は最初から読まれることもなく、ただちに焼き捨てられた。そして、これは当然かもしれないが、調査のうえで投書の内容に虚偽があった場合は厳しく罰せられた。もちろん、これらは誣告ぶこく（ウソを言って人を陥れること）を防ぐためである。

また、御家人など幕府直属の家臣が投書することも原則として禁じていた。幕府には目付という監察官がいるのだから、それに訴えるのが筋だという理由である。

逆に言えば、百姓・町人あるいは浪人は初めて役人の不正を訴える手段を持ったことになる。吉宗はまた、町人などの訴訟が役所の怠慢によって進まないことに注目し、奉行所に対しては訴訟が十か月以上（後に6か月以上に短縮）滞っているものは報告させ早期解決を促すと共に、そうした訴訟の遅滞については目安箱に投書されたものをどんどん取り上げた。こうなると「官僚」は自分の出世にかかわるから、積極的に訴訟をさばくようになりスピードアップが実現した。どこかの国の裁判所に聞かせたいような話だ。

また、訴訟が遅れる根本原因に基準となる成文法典がないことに気付いた吉宗は、現在の刑法と民法を合わせた形の裁判法規である「公事方御定書くじかたおさだめがき」も作らせた。これは上下巻に分かれており下巻の方は特に「御定書百箇条ひやくかじょう」（実際は103条ある）、これが実質的な刑法および刑事訴訟法であった。

⑤

また、この制定過程で、過去の判例などの公文書が効率的に保存されていないのにも気が付いた吉宗は、町奉行所のみならず勘定奉行所や評定所などの公文書を整理・保存し、また閲覧できるようにシステムを作った。大仰に言えば、吉宗以前公文書は各役所でバラバラに作成され保管されており、それを有効に活用するシステムは存在しなかったのだ。

吉宗が「庶民とのホットライン」ともいうべき目安箱を設置したのは、不正があればただちに將軍の耳に達するシステムを作ること、江戸開幕以来だらけきった官僚制度を活性化させようという狙いがあった。

つまり、「幕府といえどもマチガイを犯すことはある」という、目安箱設置の「哲学」の中には、「自分（吉宗）」は入っていないなかったのである。自分はあくまで正しいが、幕閣はゆるみきっている、というのが設置当初の吉宗の認識だったのだ。

ところが、いぎ目安箱を設置してみると「上様、あなただって結構おかしなことをやっているではないですか」という投書が来たのである。

やましたこうない、じょうしよ
山下幸内の上書という。

山下幸内の素性については詳しくはわかっていない。

しかし、元紀州藩士の浪人で謙信流の軍学者だったとも言われているから、想像をたくましくすれば紀州で吉宗が加納新之助と呼ばれていた頃の知人か友人かもしれない。だが、仮にそうい

⑥

う関係であったとしても、今は幸内は浪人で吉宗は將軍だ。身分には天と地の開きがある。いくら吉宗が「御政道に対して意見あらば投書せよ」といっても、それまでは將軍に対して批判がましいことを言っただけで首がとぶ時代だから、幸内が極めて勇氣ある人間であったことは間違いない。

その上書は、歴史上「諫言かんしよ（主君を諫める書）」の手本として、長く語り継がれることになったが、原文は長文にわたるので、ここでは江戸時代の随筆集『翁草おきなぐさ』に要約されて収められたものを紹介しよう。

書き出しは次のようなものだ。

乍恐口上

恭曰、天下の武將と備らせ玉ふ御大將は、古より悉く奉撰將器判談めいこうの明衡を以て、名將愚將の境明らか記録して、武門の家々に留り、末世の鏡となし、尤も異国へも年経ては渡り候なれば、至て御身持御政道御恥敷御事に御座候。然るに権現様以来、珍敷も当將軍様、自然と御名將に備はらせられ、天下の万民歎の色を成すは、此の時に御座候。依之一書奉献上、猶当時世上の風聞を詳に奉書上候。御心得の端にも相成候へば、猶の義にて、一天下の響に成候事に御座候。尤も隠し目付等、数多御出し被成候は、世上の風聞、上聞に達し候と、是

⑦

又風聞仕候へ共、有の儘には不被申上候故か、又は面々の身を大切にかため候心故に、細か
成る事は、御目付衆も不被存と相見え申候、恐多き申事に御座候へども、下拙申上候趣は、
一たび御耳に達し奉り候へば、天然自然の道理を以て、天下国家の御為には其の儘相成候
事、具に御感味可被遊候。

〔日本随筆大成〕⑩ 『翁草』 神沢杜口^{かんざわとこう}著 関根正直他監修 吉川弘文館刊

〈大意〉

おそれながら申し上げる。

古来より天下に名を轟かせた武将は、その業績を記録し後世に残すことによつて、人々の
模範となつてこられた。御当代の將軍にとつては大変なこととお察しするが、幸い神君徳川
家康公以来、めずらしくも御当代様（吉宗）は名君と評判が高い。そこで、私がいま巷^{ちまた}の評
判をお伝えしますので、ぜひ御政道の参考にして頂きたい。もつとも「隠し目付（隠密）」
多数を巷に放たれて様々な情報を得ているとは伺っている。だがこうした者たちが本当のこ
とをありのままに上様に申し上げているのか。いや、むしろ我が身を大切にするあまり、肝
心な評判がどうやら伝わっていないようにお見受けする。まことに失礼ながら、ありのまま
を申し上げるので、ぜひ御政道の参考にして頂きたい。

①

相当に皮肉を込めた言い回しである。

言葉は丁寧だが、要するに「あんたのところには本当の諫言かんげんが届いてないでしょう」と言っている。それも「隠し目付を大勢使っているようだが、効果はあがってませんな」と批判したうえでのことだ。

これだけでも無礼千万で、たとえば五代綱吉にこんな上書をしたら（目安箱が無いのでそもそも將軍の目には触れないが）、まちがいなく死刑であろう。

しかし、これはあくまで「序文」である。

まず、初めは吉宗のことを褒めている。

それは箇条書きにすると次のようなものだ。

一、紀州からあまり家臣を連れて来ず、また連れてきた者に大幅な加増をしなかったこと。

一、幕閣の経費節減につとめたこと。

一、みだりに人を処刑しなかったこと。

9

一、賄賂^{わいろ}を取り締まったこと。

一、河川改修や堤防建設など、一番の力では困難な公共工事に幕府が助力する体制を作ったこと。

他にもあるが、要するにこれが当時一般の庶民からみても、明らかに吉宗の善政として評価できるものであったということだろう。ちなみに町火消（いろは48組）の制度は既に発足しているが、これについては幸内は特に言及していない。おそらく町火消は江戸という一都市の問題であって、天下国家の問題とはまた別という認識があったのではないかと思われる。とにかく幸内はこのようにまず吉宗の善政を褒めたあとで、吉宗の政治には一人よがりの部分がありそれが「御修業御不足なる証拠」であるから、ここで「良薬は口に苦し」のたとえ通り、ぜひ「衆人の評するところ（つまり、庶民の批判）」を聞いて頂きたい、と述べていよいよ「批判（批判という言葉自体は一度も使っていない）」に入っている。

たとえば、吉宗は武士があまりにも太平の世に慣れ過ぎ、武士の本分である武技を忘れていると、生類憐れみの令の時代には絶えて行なわれなかった鷹狩りを復活した。これは軍学者で武士

の本分を大切にすする幸内から見ても評価できることではないかと一応は考えられるのだが、実際は違った。幸内はむしろ厳しく批判したのである。

一四季の御狩は、武将の御役目にて御座候、其の外は御遊興一通りにて御座候へば、御用捨可被遊御事、第一江戸近在、殊外困窮仕事に御座候。外に御楽みは可有御座と奉存候、御遊興の為に、人民を困候事、乍恐如何敷奉存候、人間の欣は天の欣と承り候へば、富も不驕貧も不恨こそ、武門の美景上無き御楽みと奉存候。頃日世上の風説に、御鷹野は仮令ケレウの御事にて、備立人数扱等被遊、御采配を以て、御人数を御仕ひならし被遊候由、専風聞仕候、尤も四季の御狩は軍ならしに御座候へば、乍恐御尤千万奉存候、然れども今の御采配にて、御自由に御人数御遣ひ被遊候共、生死の場に臨ての御規矩には成申間敷、以前に申上候人を撓て御遣ひ被遊候にて御座候、夫よりは真の御采配を以て御遣ひ被遊候はゞ、人も又心服して、御下知に可奉隨、則奉献候三つの采配を余流と御くらべ、御考味可被遊事。(引用前掲書)

〈大意〉

御鷹狩りというものは武将の大切な習練の一つでござる。しかし、訓練として時々行なわれるならともかく、楽しみとして頻繁に行なうべきものではござらぬ。第一、江戸近在の百

(11)

姓にとっては畑仕事にさしつかえる大迷惑以外の何物でもなく、お楽しみのことは他にもござるのだからそちらをされるべきでござろう。君主が自分の楽しみのために人民を困らせることは、おそれながらいかなものかと存ずる。もつとも、世上の噂では、上様の鷹狩りは娯楽というよりは軍事教練のようなものだとは何っております。しかし、そのような遊興の場では決して生死の場（戦場）で役立つような訓練にはなり申さぬ――。

言ってみれば、ケチヨンケチヨンにけなしているわけだ。

しかし、鷹狩り批判はほんの一部であって、幸内が最も批判しているのはこれではない。

経済政策である。

全体を貫いている幸内の批判の骨子は実は「吉宗は器が小さい」ということなのだ。つまり、一見善政のように見られるものも、紀州藩主としてなら結構だが、天下の將軍の政治としては余りにみみっちいものだというのが、その内容なのである。

そして、幸内がもつともみみっちいものとして批判しているのが、吉宗が徹底的に進めていた、けんやく儉約政策、現代風に言えば財政緊縮政策なのである。

12

まずは「養生所」である。

後世この「小石川養生所」の他に幕末になって「長崎養生所（日本初の西洋式病院）」が設けられたが、通常「養生所」といえば小石川に吉宗が創設したものを指す。これは、よく知られているように目安箱の投書によって作られたものだ。

投書したのは小川^{しやうせん}（広正）という町医者であった。笹船は他ならぬ江戸小石川で開業していたが、極貧の看病する人もおらず、薬代も払えないような病人を収容し治療する施設を作るべきだという趣旨を目安箱に書いたのである。

吉宗は、これを受けてただちに、養生所を設立した。当初は「施薬院」と呼ばれたが、小石川に作ったのはそこに笹船がいたからではない、幕府の薬草園があったからだ。

しかし、吉宗は実務家で、若い頃は家臣の子として育った経験もあり、こうしたことは官僚に命ずると何かとうまく行かないことを知っている。そこで、吉宗は投書者の笹船自身とその子を養生所の世話役に任じた。

こうしたところが、それまでの將軍になかったところで、血の通った行政そして人事だと評価していいだろう。

特筆すべきは、入所者の治療費も食費もすべて無料だったことだ。最初は、入所の他に通院者も認めていたが、これは一年で廃止された。おそらく予算面で問題があったのだろうが、それで

も当初四十人だった入所者は百人以上となり、医師の数も二名から五名プラス見習い医師に増員された。

中世のヨーロッパでも、修道院などは慈善として貧しい病人の救済は行なっていたものの、行政がこれほど丁寧に貧しい病人の面倒を見た例を私は知らない。

小川笙船はこの養生所を発案し、長年運営にあたった功績で、御殿医ごてんい（幕府お抱え医師）に推挙されたが、この当時としては巨大な名誉を老齢を理由に辞退した。おそらくはそういう名誉欲の無い、まさに「赤ひげ」のような医師だったのだろう。言うまでもなく、黒澤明監督の『赤ひげ』（三船敏郎主演）はこの小石川養生所をモデルにしたものである。

これは後に「寛政の改革」編で詳しく述べるが、寛政年間には火附盗賊ひつけとうぞく改長谷川平蔵の建言によって、時の幕府は初めて「教育刑務所」つまり懲罰というよりは犯罪人の社会復帰を目標とし、再犯を防ぐために囚人に手に職をつけさせる目的の、石川島人足寄場を開設している。

これは、幕府の「人権尊重」の現われというよりは、長く平和が続いたために「行政サービス」が向上したと考えた方がいいかもしれないが、ヨーロッパ（当然アメリカは生まれたばかり）にこのような施設が出現したのも、私の記憶ではもっと後の時代だったはずだ。

やはり、綱吉に始まった「生命尊重」の伝統が吉宗を経て強化されていったと考えるのが妥当かもしれない。

では、吉宗の「善政」のうち最大のものは一体なんだろうか？

ある人は「目安箱の設置」だといい、ある人は「足高たしかの制（能力本位の人材登用）」だという。「いろは四十七組の町火消の設置」は江戸に限ったことだから、これは吉宗というより大岡忠相の善政とした方がいいかもしれない。むしろ、その大岡を活躍させた「足高の制」こそ評価の対象にすべきだという考え方があがるが、私もこれに賛成だ。

吉宗の「善政」と呼ぶよりは、幕府側から見た根本的改革といえるものに、定免制じようめんの採用がある。

定免制というのは検見けみ制の反対語である。

幕府の基本財政は米を年貢として徴収するところにあつた。

ところが米の出来高は天候によって左右され毎年違う。豊作の年もあれば凶作の年もある。したがって、毎年の作柄を見て年貢の率を決めようというのが検見制である。「変動課税制」と呼んでいいかもしれない。

だが、吉宗はそれを定免制に改めた。

過去十年の収穫量の平均値を求め、豊作・凶作にかかわらず毎年それを徴収するというものだ。

これは実は農民にとってはたまったものではない。豊作の時はいいが、凶作の時はなけなしの

米を奪われる結果になる。だから農民にとっては良い制度とは言い難い。

だが、政府の立場からみると、こちらの方が利点が多いのである。

第一に、毎年の年収が固定する。したがって予算も立てやすく、国家財政が計画的になる。

そして、もう一つ大きいのが、役人の不正を防ぐ効果があることだった。「検見」というのは人間が収穫高を判定するということだ。実際どれだけ収穫があったかを公平公正に見ることは難しい。欲の深い役人は税を横領しようとして高目に判定するかもしれない。そうはさせじと農民側がワイロを贈って低目に判定してもらおうということも有り得る。要は不正の介在する要素が大きく、かといって細かく取り締まるには極めて難しい状況だ。

そこで、吉宗は検見制を廃し定免制にしたのである。

定免制とは国家（政府）の改革にはなったが、農民の側から見れば必ずしも歓迎すべきことではなかった。「悪代官」が出る余地は少なくなったが、逃げ場も無くなったからだ。

しかし、吉宗もただ政府の効率だけを考えたわけではなかった。米の収入が安定するということは、計画的に備蓄するということも可能になる。

実は、享保年間には大飢饉ききんがあった。

これは「ウンカ」と呼ばれる虫による凶作が原因だった。

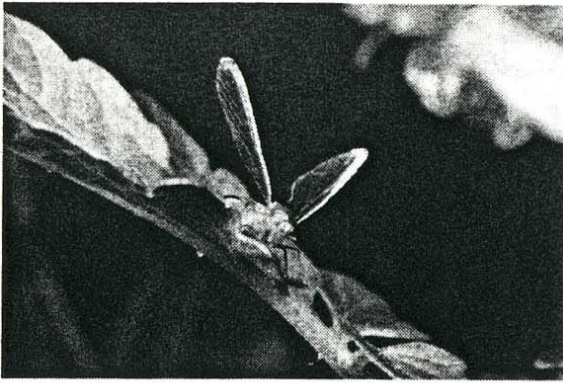
何度か述べたと思うが「農業こそ自然との調和」というのは真っ赤なウソである。

本当の自然とは「水田」のような「人工物」の無いところを言う。日本には「水田あってこそ自然の水の循環が保たれる」という「理論」を補助金獲得の口実として使う人もいるようだが、これも真っ赤なウソである。

農業とは組織的な自然破壊であって、それは工業に比べれば若干「地球に優しい」ということに過ぎない。

人間による自然破壊は、人間が動物の「仲間」から抜け出した時に既に始まっている。斧や包丁（石器でもいい）など道具と火の使用からである。

本来、自然とは原野であり、あらゆる植物や動物や昆虫が自由に平等に活動する場所だ。ところが、人間は自分たちの食糧の確保を目的として、原野を破壊して稲（あるいは麦）などの特定の植物だけを選択して育てようとする。これが田畑だ。その田畑の周囲は「自然状態」だから、虫や鳥や獣は彼等のルールに従って「自由に稲を食べようと田畑に「侵入」してくる。植物学者でもあった昭和天皇は「野の草はすべて名前がある。雑草などというものはない」とおっしゃったそうだが、人間は田畑を「荒らす」彼等を、害虫・害鳥・害獣などと呼び、「悪」として排除しようとする。トキ



■アカハネナガウンカ

がなぜ滅亡しかかっているかといえ、**「害鳥」**だったからだし、農薬をなぜ使わなければいけないかといえ、**農薬なしに害虫を駆除するのは極めて難しい**からだ。もちろん、いくら農薬なしの農業は手間がかかるからといって、今の中国で多くの農民が行なっているような基準を越えた無茶苦茶な量の農薬投与はダメだ。昨年のアメリカの**「毒入りペットフード事件」**も原料の中国産小麦が原因といわれている。しかし、だからといって**「すべて無農薬にすればいいじゃないか」**という考え方も脳天気過ぎる。

江戸時代には農薬らしい農薬がなかった。

だから、こうした**「害虫」**の大量発生という**「自然の猛威」**の前に、幕府も農民もなす術がなかった。

あの悪名高い**「遺伝子組み替え作物」**も、なぜ存在するかといえ、**農薬（つまり人手も）**を使わずに害虫を防ぐため、なのである。

ウンカは半翅目はんしもくウンカ科の昆虫で、特にセジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカの三種が稲を食い尽くす**「害虫」**である。

実は、大飢饉となった一七三二年（享保17）初夏の予測では作柄はよかった。つまり気候条件はよく豊作になるかもしれないのだ。ところが、ウンカの大群が九州から四国そして近畿にかけて大発生し、収穫はほとんど食いつくされてしまった。

特にひどかったのが伊予松山藩の領内で、餓死者はおよそ三千五百人にものぼった。ここには「義民作兵衛」の話が伝わっている。凶作で食べ物がなく、作兵衛の父も子も餓死してしまった。しかし、作兵衛は食糧を持っていた。俵一つ分の麦である。しかし、作兵衛は体が弱って死の寸前になっても、仲間がいくら勧めてもその俵の中味に手をつけず、ついに彼自身も餓死した。なぜ作兵衛は俵の中味に手をつけなかったか？

それが麦の種だったからである。これを食べてしまえば翌年植えるものがなくなる。それでは食糧ができず同じ苦しみをまた繰り返すだけだ。そのために作兵衛は地獄の苦しみにあえぎながらも決して手をつけなかったのである。新約聖書の「一粒の麦」の話を思い出させる美談、いや哀話である。とにかく、作兵衛のおかげで翌年種まきが出来て、多くの村人が命をつないだという。

この時、全国の餓死者の数は約九十七万人にものぼった。

しかし、吉宗が計画的に備蓄しておいた米を放出して救済にあたったからこそ、この程度で済んだのは事実である。だから吉宗に面と向かって「あなたの定免制採用はかえって農民の負担となったのではないか」と批判すれば、おそらく「それは違う。計画的に予算を立て備蓄もできる体制にしたからこそ、多くの農民の命を救うことができたのだ」と反論してくるだろう。

だから、この定免制採用への評価はなかなか難しい。政府組織としての幕府の機構改革の一環

としてなら、評価できることは間違いないが――。
また、次のような見方もある。

思うに、享保の改革といい、吉宗の治と称せられるものなかで、もつとも後世に利益をもたらしたものはなんであるかというならば、それは定免制でも、目安箱の設置でも、はたまた足高の制でもない。それは、古い常識的な観念をすてて、事実^{じつじ}に即した学問、すなわち実学^{じつがく}を奨励していったことにある。洋書の禁を解いたことにあるといってもさしつかえないのである。

〔『日本の歴史』⑩ 町人の実力』奈良本辰也著 中央公論新社刊〕

そう、吉宗は「キリスト教に関するもの以外で漢訳（中国語に訳されたもの）」という制限つきながら、鎖国以来初めて「洋書」を読めるようにしたのである。

■ サツマイモ栽培の普及で飢餓を「過去」にした偉業

確かに後世への影響ということを考えるなら、吉宗が「洋書（漢訳）」を解禁したことは、鎖国体制に風穴を開け明治維新への道を準備した快挙といえるかもしれない。

蘭学者つまりオランダ式西洋学問の徒が出現したのも、そもそもこの下地があったからだ。

吉宗の孫の老中松平定信は、寛政の「改革」で「異学の禁」すなわち儒学の中ですら朱子学以外の学問を禁じるという思想統制に出たが、それと比較すれば時代が古い吉宗の方がはるかに開明的である。

この時代の代表的な学者といえば青木昆陽こんようであるが、そもそも昆陽は吉宗が見出した人物であり、しかも吉宗はもともと儒学者であった昆陽にオランダ語習得を命じているのだ。

日本にも、オランダ語を読み書き話すことの出来る人材はいた。長崎の和蘭陀通詞オランダつうじ（オランダ語通訳）である。しかし、それ以外の人間はそもそもオランダ人との接触すら禁じられていたから、蘭学など生まれようもなかった。

吉宗の功績はもう一つある。

この昆陽に甘藷かんしよつまりサツマイモの栽培を命じ、これを日本に普及させたことである。

ひょっとすると、現代の日本人はこれがどれほど重大なことであったか、忘れているのかもしれない。サツマイモを普及させることは、「目安箱」や「小石川養生所」に比べたら、それほど重要な功績だと思っていない人が多いのではないか。実は話はまったく逆なのかもしれないのである。

ここで少し「農業論」いや「飢饉論」を展開したい。歴史を理解するのにこれは重要なポイントであるからだ。



■青木昆陽像

が大量の収穫を生み、初めて人類に余裕というものが出来た。人は学術や芸術や文化を語ることが出来るようになった。世界四大文明の出現である。ピラミッドも「食うや食わずの生活」では決して出来ない。

しかし、相変わらず「飢え」は「疫病」と並んで人類最大の敵であった。四大文明の一つインダス文明が呆気なく滅んだのも、気候の変化による農業生産の激減にあるのではないかという説もあるくらいだ。

現代の日本では死語となりつつある言葉に「飢饉」と「餓死」がある。これは決して地球から根絶されたわけではなく、北朝鮮やアフリカでは今でも珍しいことではないが、実は人類の歴史というのはこの「飢え」との「闘争史」でもあったのだ。

「食うや食わずの生活」という言葉が今もある通り、人間食うことに追われていては何も出来ない。今からおよそ五千年ほど前に「大河のほとり」で、その氾濫はんらんによってもたらされる肥沃ひよな土

人間の数を「人口」と呼ぶように、人は物を食べなければ生きていけない。そのためには農業がうまく行く必要がある。ところが、昔は意外なところで農業がうまく行かないというケースがあった。

たとえば琉球王国（沖縄県）や薩摩国（鹿児島県）である。これらの地は、特に東日本に比べれば気候は温暖である。だから、餓死など無かったと思うと大間違いで、実は東日本では豊作の時も、この地方では餓死者が多く出ていたのである。なぜ、そんなことになるかといえば、米（稲）という作物は大量に水を必要とするからだ。平均気温が高いだけではダメなのである。特に薩摩国は火山灰台地で保水力がないうえに、地味もよくない。平たく言えば、暖かいだけで米などまったく出来ない土地なのである。もちろん現在は品種改良が行なわれ決してそうではないが昔はひどかった。つまり薩摩国というのは日本国の中でも餓死者の多い国だったのである。この状況を一変させたのが甘藷かんじよつまりサツマイモなのである。

サツマイモは火山灰台地のような他の作物をまったく受け付けないような土地でも出来る。それも稲のような面倒臭い世話は一切いらぬ。放っておいても増えてくれる。しかも栄養価は高く味もいい。

理想的な救荒作物（飢饉対策になる作物）なのである。まさに天からの贈り物なのだ。

これは中央アメリカ原産らしい。コロンブスが持ち帰りそれがスペインの東南アジアの植民地

に広がり、中国を経て琉球に渡った。そしてまず琉球の飢餓を救った。琉球へ初めてこれを伝えた人（野國総管）は芋大主と呼ばれている。

その琉球王国は薩摩藩の実質的領土となったが、その時代琉球を訪れた薩摩の船乗り前田利右衛門がこれを持ち帰り薩摩国全土にこれを広めた。

そして奇跡が起こった。薩摩全土が飢餓から解放されたのである。

「前田利右衛門」というと、イモ焼酎のブランド名にもなっているが、薩摩国に起こった劇的な変化がもう一つある。「酒が作れるようになった」ということだ。

お気付きだろうか？ 「食うや食わず」の国では、あらゆる穀物が食べ尽くされた。それでも餓死者が出たということは「不足」だったということだ。

ところが、この甘藷が伝わったことによって、一人の餓死者も出さなくなったばかりでなく、「余った作物」を酒の原料に回せるようになったということなのだ。ちなみに甘藷（正式な和名）のことを一般にはサツマイモと呼ぶが、これは薩摩国から伝わったからで、当の薩摩国つまり現在の鹿児島では今もカライモと呼ぶ。唐（実際には琉球）から伝わったからだが、前田利右衛門は甘藷翁（カライモオンジョ）と呼ばれて地元指宿市山川の神社に神として祭られている。ちなみに二〇〇五年は利右衛門がカライモを持ち帰って以来三百年の記念すべき年であった。

薩摩国から餓死者がいなくなったというのは決して誇張ではない。なによりも吉宗が初めて甘

諸というものに関心を抱いたのが、これが理由だったからである。

享保の大飢饉は全国で九十七万人もの餓死者を出した。当時の人口は正確にはわからないが、石高（米の生産高）を元に計算すると二千五百万人程度ではなかったか。そうだとすると日本の総人口の四パーセント弱が死んだということだ。これを現在の人口（1億2500万人）で考えると四百七十五万人死んだことになる。ものすごい数であることがおわかり頂けるだろう。

ところがこの享保の大飢饉で薩摩国ばかりは一人も餓死者を出さなかったのである。これはまさに奇跡的な出来事だ。そこで吉宗はその理由は一体何なのかと注目した結果、甘藷の存在を知ったというわけだ。

そして、青木昆陽に命じて幕府の薬草園で正式に試験栽培させた。これが本州四国に甘藷が広く普及するきっかけとなったのである。

昆陽以前にも、もっと早く甘藷は東日本で栽培されていたという説もある。しかし、大々的に栽培されるきっかけを作ったのは昆陽であることは動かない。

この点はカライモオンジョ（前田利右衛門）も同じで、彼以前にイモを持ち帰った人がいるという説もある。しかし、問題は栽培を広めたかどうかだ。それが一番重要なことである。

歴史の英雄・偉人のやったことは、それが偉業であればあるほど忘れられやすい。この歴史の皮肉な「法則」については何度も述べた。

信長は宗教勢力の武装解除（政教分離）を成し遂げ、徳川綱吉は「生命を尊重する社会」を築き上げた。それは明らかにこの二人しか出来なかった大功績なのに、ある人は「信長は宗教人を大勢殺したから政治家としては評価できない」と言い、ある人は「綱吉は人より犬を大事にしたバカ殿だ」と言う。歴史がわかっていないのである。

この大誤解された二人に比べれば、カライモオンジョは「忘れられただけに過ぎない」からまだ「マシ」といえるかもしれないが、それにしても少なくとも西日本から関東にかけて飢餓というものを「過去」にした、この人々の業績は忘れるべきではないだろう。

吉宗がこれを普及させたことによって、以後東日本では飢饉の餓死者が激減した。江戸中期の九十七万人が「最高記録」というのも、それが理由なのである。

サツマイモにも欠点はある。

それは寒冷地では育ちにくいということだ。

だから「救荒作物のエース」であるサツマイモも、特に東北地方では効力が薄かった。

だからこそ江戸時代後期になっても陸奥国南部あたりでは餓死者が絶えなかったのである。この問題が本当に解決したのは、実は昭和になってからで並河成資なみかわなりしげという農林省（当時）の技官が「農林一号」という水稻の新種を改良で産み出してからだ。

昔は、それも昭和初期までは、北陸米というのは「マズイ米」の代名詞であった。嘘のような

話だが本当だ。しかも冷害に弱く、育成にも時間がかかったから台風等の被害にもあうことが多かった。

それが農林一号の開発によって、収穫は早く多くなり、味まで良くなった。この「子孫」にあたるのがコシヒカリでありササニシキであるのだから、この品種がいかに革命的なものであったかわかるだろう。昭和の日本を狂わせた「二・二六事件」の背景には、冷害に悩まされた東北農民の困窮があるのだが、だからこそこの農林一号の普及がもう少し早ければ、昭和史は変わっていたとする論者すらいるのである。

農林一号は昭和前半期の飢饉には間に合わなかったが、敗戦直後の食糧難を曲がりなりにも克服できた背景には、この農林一号による米の増産があつた。米は熱帯原産で、本来なら暖かい地方の方が味もよく育ちやすいはずだが、農林一号はこの常識を完全に変えた。

だからこそ、われわれは今、日本北部の新潟県や山形県を「米どころ」だと思っている。実際、そうなのだが、なぜ「熱帯原産の植物」の本場が「北部」なのかを考えてみれば、この偉大な業績の持つ意味がよくわかるはずだ。

またサツマイモの話に戻れば、今日サツマイモの世界最大の生産国はどこか御存じだろうか？ もちろん世界一の人口を誇る中国である。中国は全世界の生産量の八割以上を占めており、FAO（国連食糧農業機関）の統計によれば生産量は一億千五百万トン（全世界の84パーセント）

002年)である。二位はウガンダの二百五十万トン(2500万トンではない)つまり一・八パーセントしかないという(日本は103万トンで世界第8位)。

「人口」の世界一多い国が、いかにしてその「人口」を支えているか、よく理解できるだろう。もちろん人間が直接食べるだけでなく、デンプンや酒の原料にしたり、家畜の飼料にしたりする。収穫をそちらに回すことによって、他の米や麦はもっと人間の口に入ることになるわけだ。

それにしても中国もそれだけのノウハウを持っているなら北朝鮮にも分けてやればいいと思うのだが、やはり寒冷地で育ちにくいということがネックになっているのかもしれない。あるいは常に、周辺国の弱味を握っておきたいという中華的発想が底にあるのか。

いずれにせよ、吉宗の政治に善政の部分がかなり多いことは事実だ。しかし、どんな人間にも人間である以上欠点はある。名君と呼ばれた吉宗も決して例外ではない。

■「建前の米本位制」が抱えた「米の増産が窮乏を招く」大矛盾

吉宗の政治家としての最大の欠点は、生きた経済というものが、まるでわからないということであった。

なぜ、そうなのか？

理由を先に述べるなら、その基本的教養が儒教だったからだ。江戸時代の人間、特に武士階級